
± F 1 5

弓枝 秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

±F15

【Zコード】

Z8446J

【作者名】

弓枝 秋

【あらすじ】

食べ物の恨みは恐ろしい。

妻の嫉妬も恐ろしい。

義弟の笑顔も、たまに恐ろしい。

そんな、普通なようで普通でない露系日本人のジール一家が繰り広げるスラップステイックコメディ。

一話完結型です。

ハロウイーン編

ジール家に朝が訪れた。

「サルトー、ネクタイどこ?」

この家では、母親は滅多に家事をしない。さういふ、父も兄もそういう言つた能力とは無縁の存在だったので、末弟でA型のサルトムスキーゲいつも文句を言いながらも、テキパキとこなしていく。

「そこにあるだろ」

朝食のベーコンエッグを作りながら、不機嫌そうにあごでアイロン台を指した。昨日の夜、眠気と戦いながらアイロン掛けをしたのだった。

「あー、あつあつた。あ、お茶ちよつい。ぬるめで」

横柄な態度で、兄がテーブルにつく。

(お前は嫌なファミレスの客か)

睨みながら、答えるサルトムスキー。

「テーブルにおいてあるのが見えねえのか、お前は

「お、流石は俺の弟。用意がいいね」

(用意がいいね、じゃねーつつの)

心の中でブツブツ文句を言いながら、今日も見事な半熟ベーコン

エッグを作り上げる。

兄はしばらく黙つて『えられた食事を食べていたが、ふとカレンダーを眺めた。

「今日は、十月三十一日か。つて」とは、ハロウイーンじゃん。サルト

「自分でしる」

「んだよ、機嫌悪いなあ」

「当たり前だ。サルトサルトとやかましいわ、この生活無能力者！俺はサルじやねえし、テメエの妻でもねえ！」

「そうだなあ、義兄弟でも結婚できりやあ、有り難いんだけどなあ」

「…………」

妙な寒気がして、サルトの肌には鳥肌が立つっていた。

「男同士だぞ？」

「オランダじや、同性婚は法的に認められてるんだぞ」

知識を自慢するかのように[冗談（と信じたい）]を言ひ兄に、サルトは超絶に嫌そうな顔をした。

「問題は法律よりお前の神経だ、この変態つ」

「……本氣にするなよ」

無言でサルトはまだ熱湯の入つている急須を手に取る。次に何が起じるかを予想して、兄は戦慄した。

「ちよつ。だああ、わかつた、わかつたからー、頼むから急須を投げるなよ」

「わかつたなら、自分のことは自分でやれ！ つたく……」

「はいはい。あ、サルト。晩飯はアジの開きに
「早よ会社行かんかいッ！」

（～10時間後）

「とか何とか言つて、アジを買つている自分が悲しい」

学校も終わり、サルトムスキーは近所のスーパー・マーケットにいた。

（しかも奥様方と混ざつて買い物をすることになってしまった自分も悲しいやな……）

アジをかごに入れたあと、お魚コーナーを通り過ぎると、近くのラジカセから軽快な音楽が流れてきた。

ハッピーハロウィン、ハッピーハロウィン、お菓子をくれなきやいたずらするぞ。

軽快な割に、言つてることが脅迫なのはおいといて。

「あー、ハロウイーンか」

朝の兄との会話を思い出して、サルトはお菓子コーナーと野菜コーナーの間で足が止まつた。

（そりいやハロウイーンなんて祝つたことねーなー。こじ日本だし）

兄も弟もロシア人とのハーフだが、生まれたときから日本に住んでいたため、ロシアらしさなど外見にしか出ていない。

奇妙な感慨が沸いてきて、サルトは一人、ジャック・オー・ランタンとかいうカボチャ提灯のレプリカを見つめていた。

(カボチャ、か……)

（2時間後）

「何だこれは」

帰宅後、兄はテーブルの上に狂氣を見た。

「見りやわかるだろ。今日はハロウィーンだらうが」「この上なく機嫌な姿の弟を見て、兄は目眩を覚えたとか覚えたとか。

「……………サルト、お前」「『いた』た言うな。可愛い素敵な弟様が精魂込めて作ったんだ、食え」

火花が散りそうで散らないにらみ合いのすぐ横で、何事もないよう食事を始める夫婦。

『いただきまーす』

「ちょっと、そこのお二人様、なに平凡な家庭装つて食つてんですか。ってか、問題はそこじゃねえ、サルト！」

「はいはい

「お前、今日の晩飯はアジの開きにしてくれつづつただろーがあああっ！ なんでつ、なんで全部カボチャなんだようおつ！…」

きりりとした汗をぬぐいながら、満面の笑みでサルトは答える。

「うん、苦労したなあ。カボチャってレパートリー少なくて。スープだろ、煮付けだろ、カボチャサラダに焼きカボチャのソイソース炒め、パンプキンパイにカボチャご飯。あ、カボチャのおひたしも作つたつ

け

答えになつていない。

「あり得ねえ、絶対食えたモンじゃねえ。特におひたし

「うん、だから食え」

サルトは微笑むばかりであつた。

返す言葉を失い、悔しげにアギは弟を睨み付ける。

「うへ、くつそ。わあーつたよ。カボチャは食つてやる。ただしアジを食つてからだ！ アジを出せい、このつー！」

「あ、そう？」

にんまり。

「ヒツー！」

今までの笑顔を越えた笑顔に、正直にも兄はビクッと反応した。

(な、何だ、あの罠にかけた狸をこれから煮込んで食つちまおう的、
日本昔話の老婆の微笑みは)

たとえがいまいち混乱氣味な兄。

兄のそんな様子を知つて知らずか、相変わらず不氣味な笑みをた

たえて、サルトは一皿前に出した。

「はい」

「……？ スープ、じゃん。カボチャの」

「アジだよ」

「どこが？」

「中が」

ポク、ポク、チーン。

アギは、言葉の意味を理解するのに、三秒かかった。

(……………中？)

これはカボチャスープである。故に、底など見えはしない。つまり、何が入っていてもおかしくは、無い。

「まさか……」

「食え、せつかく用意してやつたアジだぞ？」

「うあ、ア、アジ？」

すでにペリペリまくりである。

半ば脅迫に近い形で、おそるおそる兄は箸を手にすると、スープの中に突っ込んだ。すると、案の定、何かに箸が当たる。イヤな予感がしつつも、それを引っぱり出した。

ドウロ……

と、カボチャまみれのアジが現れた。

アジは仲間になりたいようだ。勇者アギタンス、どうする？

a・食う b・食う c・ガバッと食う

「……………ゴメンナサイ」

「何が？ 冷めないうちに食べよな」

「スマセソ。お茶くらい自分で淹れますんで」

「さあ、どうぞ」

「あの、これはちょっと……」

「さあ

「……………ハイ」

その夜、アジは胃酸の海を泳いだ。

クリスマス編

『ノーノーノー・メリークリスマス!』

テレビで赤服のひげ面じいさんが、何事かわめいていた。
そんなくだらない特番を、茶をすすりながら、こたつでミカンを
むさぼる。

これが、ジール家のクリスマスである。

「ただいまー」
「お帰り、サルト」

リビングのドアを開けると、母である椎奈が一応声をかけるが、
振り向きもしない。

「おかえひー」

これは長兄、アギタンス。ミカンをほおばりながら言つたので、
言語になつていない。

サルトは鞄を部屋の角に放り投げると、そそくさとこたつに潜り
込んだ。

「なに、兄貴。今日帰んの、早くない?」
「有給使つた。クリスマスまで働いてられつか」
「うわ、もつたいな。彼女と過ごすならともかく、家族とミカン食
うために会社さぼったのかよ」
「つるへー。俺様につり合う女がいないだけだ」

アギタンスは黙つていれば、いわゆるイケメンなのだが、いかん

せん本人の性格が悪い。さらに「ブラン」と「おまけも付いてくる」ので、女がいても長く続いたためしがない。

まさにもつたいたい男だ、とサルトは思つ。

「うう、寒い。もううよ」

凍えた両手をすりあわせて、サルトムスキーは勝手に兄の湯飲みを手に取る。

しかし、アギタンスは眉をひそめて、その手を掴んだ。

「おい、じゅ。茶くらい、自分で煎れろ」

「じゃあ聞くけど、このお茶、アギが自分で煎れた?」

「……すみません、俺の茶でよければいくらでもどうぞ」

案の定、アギタンスは母に茶を煎れさせたらしい。小さな勝利にほくほくしながら、サルトは茶をすすった。

サルトの横には、父が毛布にくるまりながら、一人爆睡している。平和だ。

「それにしても、なに、テレビ。他にやつてないの?」

画面上では、子ども向けのクリスマス番組が繰り広げられている。ジール家には「さとか低年齢向きすぎると思われるのだが。

アギタンスがミカンの皮を「」箱に投げ入れながら、答えた。

「日本のクリスマスと正月なんて、くだらない特番しかやってねーよ。お前「彼氏ヒドキドキ ネズミーパークデート大研究」なんて観たいのか?」

「いえ、結構デス」

仕方がない。サルトがテレビを眺めると、ちよつとサンタが少年の家に不法侵入している所だった。

『「うわあ、サンタさん。また来てくれたんだー。』

画面上の少年は、ベッドから飛び起きたと、開口一番にやつぱつた。

『ホツホ、わしが嘘をついたことがあったかね』
『でも去年、欲しいものと違ったよ。「ゲムボーイ」が欲しかったのに、あつたのは「ゲイボーイ」だった』

サンタは絶句した。
ジール家も、絶句した。

「……なによ、ここの話。最近の子供も番組はこんなシユールなの」「そりや、最近の子供もはひねてるから。なあ、サルト?」「なんでこいつ見て言つんだよ」

兄はにやりと笑うばかりで、何も返さなかつた。
少しムシとしたが、ここにどうつかかるのも馬鹿らしい。会話の流れを変えようと、サルトが無理矢理口を開く。

「そつこやが、子供もん時、すつげえ気になつてたんだけど」
「何を?」
「いや、つちつてホートロックなのに、サンタつてビンから入つて来たんだわつって」

弟の台詞に、アギタンスは呆れたように返す。

「お前、サンタだぞ。夢とおどき話の住人だぞ。そんな現実を当てはめるなよ」

「いや、でもさ。勝手にサンタだの泥棒だの血にまみれた殺人鬼だのが入つて来れたら、まずいじゃん。防犯的に」

「やな子どもだな、お前」

「で、父上に聞いてみたんだ」

アギは珍しく、一瞬ポカンとした表情を見せた。

「な、親父殿にか！ 人選間違つてんぞ、当時のお前！」

基本的に他人に興味が無い上に、常識というものを知らない父は、この家の中で最も相談に向かない人種であった。

その父はといふと、今も横でのうのうといびきをかいている。

この人の遺伝子が受け継がれているのか、トサルトは少し泣きそうになつた。

「ん。いや……まあ、他に誰もいなかつたからさ。で――

（当時）

「お父やーん！」

「ん？」

「ねえねえ。サンタさんつて、実はお父さんの愛人なんでしょう？」

自信満々に目を輝かせて言つ息子を見て、父は黙るしかなかつた。

「合ひ鍵持つてるから、おうち入れるんだよね、ね？ 防犯システムのエラーとかじやないよね？」

「？
ああ、モニカのことか」「

父は得心がいったように頷いた。

「やつぱりいの、サシタさん！」

「サンタ＝モード」という女の」とだろう。金曜に家に来るから、お

「トキノモハタケ」

现代

「ぐあい、たたタただつ？！　な、なんだ、どうし　！」
「黙れこのスケベ男！　一体何人愛人抱えていやがった！」

起きた途端、いきなり妻にエビ反り固めをされていた父は、パニックに陥っていた。

「え、いつの？」

ちなみに母は知らないが、父の歴代の愛人たちはすでに三桁を超えている。もちろん、同時に複数の女を抱えることも珍しくない。

「……貴様、殺す！」

母の腕に、並々ならぬ力がかけられた。

「あーあ」

これもまたジール家のクリスマスかと、子ども達は一晩中、組ん
ず解れつの夫婦プロレス眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8446j/>

±F15

2010年10月8日21時46分発行